忠勇阿佐倉日記 初編 五

特
へ遠13

遠13
門
183
巻 5

明治三十九年
十月十日
購求

忠勇阿佐倉日記初輯巻之五

東都　松亭金水編次

第九

孝女天より福を降し
才子佳人と天縁を結ぶ

そもそも孝は百行の基百善の源なり。人能藝も智もありても。孝なき人は親るゝ事なし。あるは千葉の忠義はいかの水中の處女も憐れむ。さるに紀てあるは見くあれど渾身を拭ひ倩はれる家引挂て人の在ともいざさらば芦の結繁を便みて。茅屋人より来れけるに花の色いとの景勢は。遠い牧人のあるざりろう。然るはそれの為は。此処は水とも活はけんと。程庄法は身を潜めて。候ゝ編は叢雲の纍は晴て

光ハさへ薄き八日の月なれど譬て照まる千代なりとぞ噂なし呼なせり
今しも陰にて候が人が川辺に来て水を汲つ柄杓と呟きあるが。おんみ
ありしハ一息去て若狭人にてありんしが。共中へ誰て溺れやせん。不便の
ものと思ひて且く此処に佇ぎしが。ゆるりて夜陰に及び何の為にか水を
汲るいとも不測の所業なりと問ひければ。千代ハ微笑ての様にもあらぬ
気でかる妾の恥かしさ笑ひで笑ひ賜へ。身に一大事の願ひありて。怖しけれど
垢離をとる日来信ずる仏を祈るにて侍る。日中ハ人目も憚り候へば毎夜の
頃人寝ての後ると候ひ来るなり。少しも怪しきものにハあらず。然るにその気勢
を狂人と見あやまりて逃なんとせしハ見苦しき後で深くも人の心根こそあらまほしさ
けれと吾輩ハ心の急ぐを許しめへと云ひ掛て早足にたちて口をもく去るにいとも

逐ても見送りて思へり。渠ハ先年旅立たる者が門前に悩める母子あり。
かの人慈仁深けれバと是を助けり邑外れの明家に住して母子住せ
剤しき折ハ人に傭れまた時にハ郷人の衣を縫洗ひ張またハ絲採繊
を織紡ぎなどを生業を做して。その日を送る者なるが。元ハ畠山家の臣にて
名を因幡門と云ひものゝ妻子なるよし。父及べり人ハ性より育と常言
にいハめれどかの処女ハ十余り年の頃より七年八年目に不随し
業のこと漸く口で糊ふ身なれど心正しく母に事え旦暮に孝を尽
もこともさらの人ハ営せりなれバ。若きその身ハ貧しくても天より稟る聡質ハ
奪ひ難きものとぞ知る。今彼処で垢離をとりまで一大事のねがひあり
と見知る我れども仮初の義にハあらじ。孝女の苦心を見捨かね微さんもんをなせ

所為なり。玄来ものして動静を問ひ等ありしかば。佐とも為て泣き母ん
あと。その住処をさへ知りぬまでに遠ふ着て手処へ往きまづ門辺ふ腰を掛て彼の
ものと侯ふふ。寂寥として人のものもなく分がさけまで折ふ叫く声子
忠義なる者なり。遠からの頃の天行病ふ母が若むの母ん枝枝を悩ま
母の病あべいふ低ーうんと漫ふ哀まの儀さまて門の戸尾籠程とひ紀用
理へ這入バ女児い不審ふ思ふ彼まべ千葉の忠義勇ん徳るものの名ぞ
ざ親ものく知いはべ。伯のものと孫くを忠義い上り摘ふ後ち挂て奥を彼ふ
業ふ義いぞ母彼い高枕して寝て居ち。女児い涙ふ頻髪ふ話ひ拭ひ出迎へ
箇ふ四月ふ挂ーが心急まて平ふ知りまうさで死後を作り詳ーの人
と頻ふ義い忠義い舎歌と。ものも平生まうあん母生母を知るこいど改めて。

彼已ふいまざるーぎりた。豫くあん孝ば孝行るるい人母よく知て嘆とせり。
箇ふ不測のさまと彼ち。詳ーくーぎ。今ーく来て見まべ母ばーまさ病ひ
の容躰。察ーるふもの 平愈を彼ー。淋ーを河を不雄くーるも。姫離ーを
きものあん嗚呼孝ーるの貞ーるかる。吾支配せる ふ業のいい凡ものの人
別二千ふ勝り。少年少女母ーまで。あん孝ばを孝ーいるの。の男婦を
ーぎ年見賞官ば彼の蔵た男ば。治むるーふ邑の老の能否と知ーあ人ふ
いまべ。然まべあん孝ば孝行ーいーくーぎ。実年ーいーくーぎ。ーるれど元元已ば心
ーるふ傾ーる人ものふ。それと年んい所員ふ似て却て人の嘲ものあんーるの
ものを忘ものーべ。官号ーべものあん孝ば孝行と彼ーるものーべ。
傾を使ものーべ。その徳と但方へ知ーせ。褒賞あるーるけーるべ。とのひ帳

探探して把出さる白銀少し紙に包みておれあり。這の俸禄を以て
ども母はが菜料の料に進ず。途中のうて美くも持ねば再近き日に
進らんべとのみ思ふ代に子を俊巡らく。やもうざる賜りの志の方
独り有ごうにまでに辱なく。捨きをあい仕まつれども是を返し給ふ事
和君が好意に感ずに似て光穂あれども。それ雑ごに功なく食に食らぎをあ
ぬきと悼織人に供ぎ。宮あ人流まを来て人の為めに更に功なく人の
世蔭を蒙りて多年の月日安らに送まるさへも辱なに。世の来歴梱機
もあるぬ。和君よりとの賜を受ぶ。よく素給とあるの罪免うに所
の。是とに絆を乞うと口晋に返せば忠義改て徹と堂を拍ちに伏
るあん子ぐ知見胸中の達まきを壮まにあるぐ。ぐるくみ及びに。

あるまでも開いを知て其二とをぬとらるのうべ。ぬなとらのあ子
遠元い縉紳の系にもまを今流浪してらに自ら労して且暮の煙と
なる家ぐ。者元よりの土民にまでも千葉邑の荘屋にて田畑衣食
に作りあり。庶に子の勝まる所をりて人の不足を補ふこと所謂天性
殊に僅の微りのも。病と物の寸志を表さまで受さるとも不義とも
いさん。この理と汲て速に受納めて病む人の看病の料に做のとの彩
母の沖瀬い俊僧ぐ出来り。今茅い邑の忠義大人に坐
まさより。妾い千代が母に作り。今も女児を云ぬく是も遁まに因縁に
や。所も多きにこの花井が門に持病に病に迫り。拙らと云せば簡様に。
夫より後い波大人の恵に感ぐ露命。繋ぎ間い候ぬ日も。明暮

早く八年ばかりとなりて今はいとけなき女の童こうんこうぶ男さえ丈も伸て人並みなりはれども人並みに送り兼ねる痩世帯昔気質とはいとど牧亡人の思ひなりて常に持病の癪とはなりしが此の程は毎日なく強く発りて二月程より食さえ強べ難く悩むのと看病間の襲物はさまざまに縫針も世ぞの種の代もなく夫婦のことを年足らぬ女児一人の多み任せ病身の胸苦しさこの頃青ふくち出て飯事の遅さとあまど思い定めて家賃ふ所支拂へ遣るや。男女の夜拵び宜しねど。やひ返せば云理も有と心ふ収めて居さうしも今和尚が説話めてきけば妾が病気の平癒を祈るその為ふ川を水垢離を取りとや。秋八月〜秋甲斐なく拘心さえ辨ぜぬ。ひとり且暮苦労させ年ふ一回の祭祀ふも洗ひ濯せ一計月衣

まぐふも快く着せとるた宴こーさえ時節とぞひろめくろ。秋を怨むる面持も世ぬい却て皮肉なく憐るるふい狂信て恋ふとぞふも果い涙の面とのこころ沙汰を厭いまぐ年ざまざまぐ仏門ふ世ふさち生ることりやと心理の空特ふ。今はせうく十八の今日とはるまど往昔ふ狂ぞかいらぬ気ーさふ。秋ちーきこと仕もせねど。労まーを厭ひなく恋とい心ど比叡風寒けき夜半ふ垢離をとり。この身を祈る志ー実ふも怖ーとりくびえふこの沙汰ば世ふるふい天沙病のあるとーも除事ふ犯されて身ふ狂らひの出もせば。折麿のうえの吃驚ふて母ふ俱ー偶仆死とるとり他のことぞるた思ふるーも夫婦のことを辨まえぬふいあーざやまど青春心の一途ふて後とふいぬ行ちひっ秋とふふの切るふ最ふるーこの后ふ結ることせぬ和尚ふも。

忠義
孝女を憐
家ヲ利して
金を恵む
尚左秀
右義

おきせ
おちよ

よく〳〵諭してあれバこそ。然まで是等が賜ものハいとも有難き。和君が赤心辞
まで卿て无禮なりと腹立あるを知れど私ども。唯今女児も言せし通り受る
ハ実に快からざれバ。勿体なくも重ねて恵みをも受候ハん今宵ハまづ〳〵懐へ
収めて賤りあへりと押戻さまて忠義いハ手を拱きて額らいしが
独息臥居までにて愛らしきバ我らの上に何ぞ諸人ぞハ在下年まで忍
くこれまでなる愛女の教へ心をうけて孝行を帶へると見れバ円園を被せ後に玉
すて戯猛んとする底を言と悉して我ん身を驕るが譲拒むと覚えて。この倒も
まさるものにあらねど吾ハとかく老る老なるバ既に当座恵が一子なる愛寵と
義をさへ結びつる金所鉄稿の者なりとハ誰に何とも知らざるものならぬ在下
ハこの愛女が志を知りてこの為も知らぬに門口を尾治狸と閉て入来

体のものハ別人ならぬ当座恵を未まで損より忠義ハ跡へ欧やて額着ハ。
当座恵つも食教すさて彼母子を救へやまて。動静ハ鮮に表で吹ず。
忠義ぬが慈仁なるまで海遠が赤心なる。倶にかへく甘心せりし中も飾とある愛
女が孝行するハ勝ても知まで忠義ぬが蘇しの在下これを喚挙まき
ば俊悄と女らりそんまで更に立に溺るとらへよ百せんれど。飢田に当を入れバ
とらへ昔性質の頑に黙止るども心にハ慊まで〳〵己ハぬ淌もなし怒るにこの程
を母親が長く病ひに伏て一少の女児が苦心と吹く世ぞるの奈痛を隠して。
その愛しさを恤まんと心挂てハあるなれどか私のこに暇なくて一日〳〵と延さ
しが今宵ハ少の暇ありて人の嫌疑を避んが為に夜さへ若きと立ち出て
に知まで話號の声。立吹まるハ罪ありとらへども耳のあるを弁ハ軒下と

されも聞が問答なりまとらずまとなげく乾赤心のほど感心せり。その賜も
のハ快よく老母よ受納まうさるべし。お千代が孝ハ今更ふ称しつくさぬところ。
這回の義ハ並々の人にハ決して為がたく。実ふ王祥が志操ふ猶まさる大孝
ハ慮ひ量らるれども忘難ぬふあらねて委ひようた厚きまとべ縁てよりおもんと
などと云まべく母子もそまとふて喜び人とまうする母子ハ京都将軍室町殿
御所の内遅技なして自由山刀称の近習なりし者を同姓の家族とまく宮家今
ハ土民ふ在て家系をいちんも烏滸なれ。先祖ハ花井森人とて。摂政家の
被官なりし者を同とうのと営卑ハあらじ慈みふお千代が孝行を刻在や
深く感じるあまり姿容が新婦ふなさまく敬ひ。おまでもこの母子を愛憐
ふ流浪の肇めより。般若を憐まぬ者ふ従して。塩噌のとも賄ひつまべそや

郷人ハ悉く推して隠し妻ふせんなれども。あられぬ陰言いふよしを聞て流石
讒者ハ斂くぞ失より後ハ月継踈くなりしども住なれてその日を送るハ易し。さ
只べきぞ陰家なら歎くぶのみふ辞て卒爾ふ文等のことも許らびなて且ハ母子
の家の上ふいうる望さのあるべきや。夫さへ知らで新婦のことを云入なんハ康忽之
良緑の人々を得て縁まま歎とおもひなげくしまぐるその人を娶らしふ今宵おもはバ
足下ふ委ししたがまふさりての侥倖なりしハ本ふ忠義ぬ吾子ふ母子の人
の胸を安任網なるず。媒して縁を結びつあへらんやと絵ぢらひふ本ふ忠義ハ
思ハぞ本ふ膝を進めて。在下不肖ふありながら家筈大人の宮本と争ふ遠慮
いはびべき後ともいえびん今ここで太個が胸を問ひまふさんいらふおん身等今
のやく云ふ人彼方の赤心辞め條もあらじとおもへども人の心ハ種々の敬望あり

美貌つまぬ仔細あるべし。畏まべし。浩うのふべし。任意この縁組心さびとおそれを送恨ふ悔所を退くを五折蓑をさせて腹を透るなど。然る事ありと

いあるべし別て男女の縁ふ有ける。駆くとても自由ならず成も不成も

お世辺の契りもありとも吹及ぶ昌くべき丈なるふ去を為いいべし頓て胸を

吹まるり。然るべき常云ふ。生い繁ふるを家絶て心惑ひのせ〻ふ

る。今宵ようく奴子を呼て胸を定めてあきの人間五その花右を能ふ考へ。

と教び勇こて問ふ。ある者を奴の神祭いち祝ず女児の心いぎ知べ。

非人ふ劣る今のさま新婦ふ人あるふ襲物女ふも掛ける人をあるべとふ。

花井の大人の扣数ある。実べ〻べきまづ心へ。任意を思て

作る所真ありとも。身の祝を〻で焼作らく数ふ逆祥のるべき。

花井大人へこの朝倉の草刈りて逝ひ舟一艘〻あ人ふ女

已も知りぬ。然べ〻べ新婦と娶らんと。〻〻〻〻千の田地を割て逝〻

を屋〻〻〻〻〻〻〻新婦宗の家嘗別及い華川ふ人も羨むべきる。

縁い武平もあるべ〻。夫を図こんるべふ。奇怪妾ど女児をとて。新婦ふ倣

さんと作さると狭ありとい必いぬまでふ祥一けまでも縁ゝ〻べ。加の懇懃

ふ諦と重洞を挂るべく。約合ふ必べ不縁の基と必べ逆ま也老婆の思

廉ふ〻〻〻ま除やのこふ。ふふるる縁るまべまづ其義ふと縁る果べ嘗

存悪いまを挙て義奴きのふふ卑ふりあるふ。象家ふ内の命ふあり。いふふ

象ま〻慕べとも夫を憑べきとふもあるべ。ま〻家ゝとも待るふ足らべ。べ

人ゝとふ中心の伝あるこそ〻けと考ふ弟ふ望べきとのべ。その人を望むべ

今の世の俗にして新婦ハ周りにつゞく家と讓で與ふる婿ごのみして賤卑の事お
を論じまさご容貌の美悪を撰びて其の人品をバ多く撰まず。人倫の教へていやしき
凡て新婦を娶らんにハまづその女の親に孝なるや否を問べし。若その親
に孝ならバ七去の其一ハ措て却くる。縦令容貌美くして万の藝に達るとも
孝ならざるハ娶るべからず。凡て不順不孝の妻を娶りまへば舅姑にその家の
和ならずして一家を乱すもの多し。この意得こそ肝要なれと示されてあるを
実にもと思ひて縁が為に索むる。新婦もその親郷の貧富によらずして只
孝女を索むるなりと思て忠義篤実に宜しき所存なれば浅まし在下の
もその意得大人に受まゐらするといふとも母子にうち對ひ絆の心ハ解さ
なるべし。縁との他にも否さるに條あらバ遠方なり。然るうへハ大人が望ふに

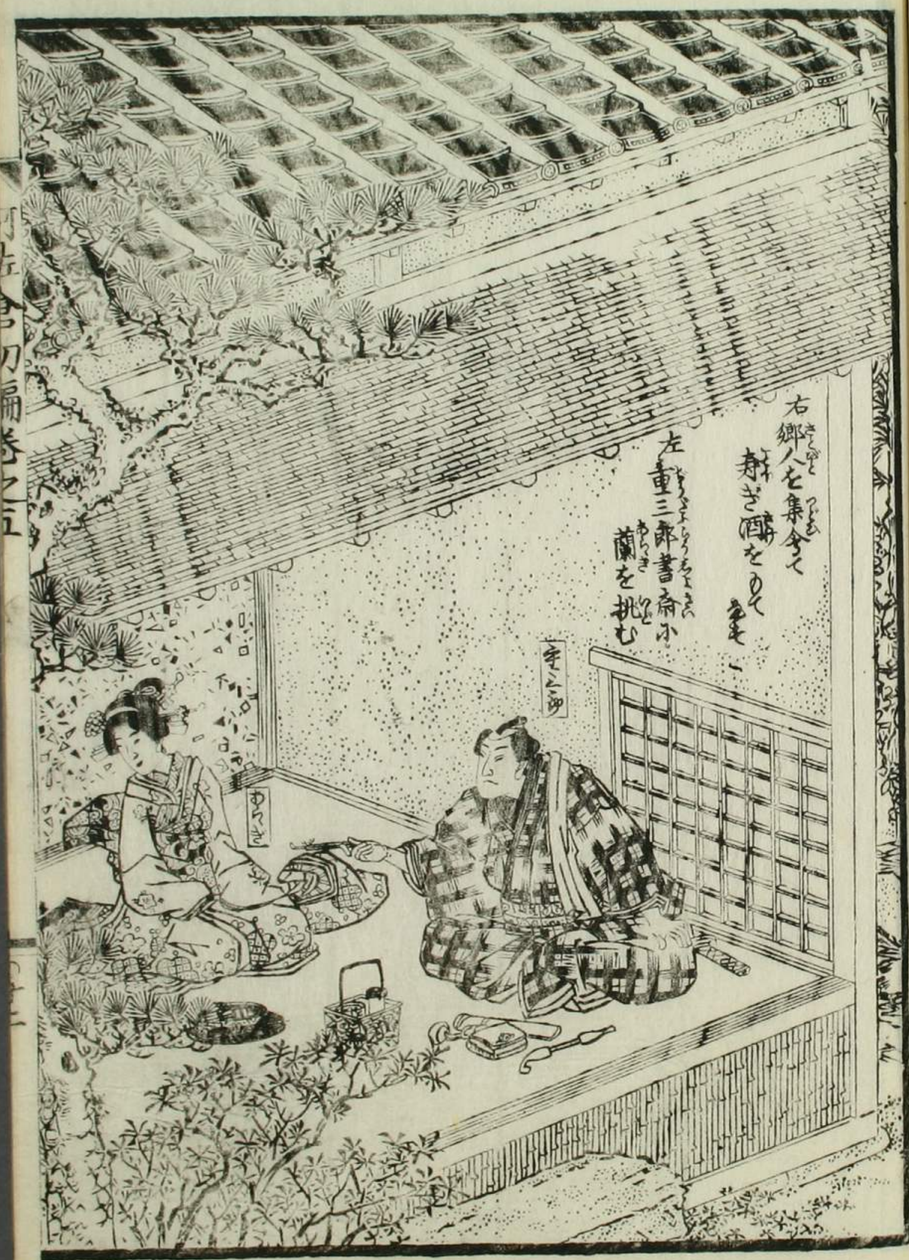
任さバ爺の恩義を謝ふに如ざらんと云けれバ沖瀬ハいと嬉し
さに胸さへ迫りて落る涙を拭ひも敢ず肩をならぬ女児を支まで諭しま
啼容子にもならての世に在しの更衣姫に召ましても猶まで嬉しく思
ひ侍りあんすれバ何にと祝する阿千代ハまだ恥らふさまに面もあげず母に
向まて鬼も角も心任せと同客の有ぐて沖瀬ハ夫婦に對ひ阿千代をも
在ハさりと云ば忠義ぬよこの人は宜しく計らひあへきとく夫婦ハうち
歓び折から来まで良縁を結べることそ歓びなれと祝ぐと語ら
ま歓くハ思ひるづく妻の縁談にも更なり病人の長ぎし言語にさぞ薬餌
けめまづ何でも忠義なる通達せんと脈を告て夫婦ハ家に皈りなく夫婦
たまハそのまゝ渾家の舒程及縁談の事言に語まへば夫婦も深く阿千

代が孝心実に尊のみど。粗略なれども貴ひ。
いとげの辟に入へ。あつ。とは五月五日なり。
い父母ありまと母のみも結髪なえ阿千代をその子の妹とする吉日良辰
を擇ミ。婚姻の式を行ひ。さまで母の沖漱をい愛者が方へ引とりて一間
を設え隔て。親が養ひ。ひろ。是より二年の後病み閉じ稱世しぬ。
弘福寺へ葬りて石塔一基の主となのぬ再婚阿千代い愛者あるつ。見ん遠
ひ老実ゆえ父母ん孝を尽し。良人愛者あらく仕えまさ。と情まとけまで
一家和合して睦まく。その次の年女子を設け。それ。子ども
そ者ども。愛者が見ぬ。子どもの対ら。ひ凡人の克まぐきみ。あ。ひと法人挙て
哀傷。程なく徳ん情ぬ。一ケ年戻ん浴まりて。もしさき年と。まるれ。

第十

貨財ん誘ひて婚儀を促し 情ん迫りて才子ん危きを拠く

人の望みの程ぐ。その根源くして惑へるの。ま情ん倍とする。然れば
仏も五戒を立て邪淫を戒て。その中ん置く。是を刑木の殺生ん喰人初その
萌を含むとき。微ん人を知ん。既ん地を貫きて二家ん出る。
男女指めて金ん比べ。ひとたびまぐ。根源く。凡を沼て。乗へ。
月と稚き月と果紙。よく情態厚きん。ひ。ば。草木枝葉と垂るん。
人淫て是を知ざるの。然まども程厚ん。益繁茂ん。ば魂
態至り極まりとして。断んとまどもその根源く。茂ども竭ども減せば。
終ん一生の身と過て。肇めて性の非を覚まさ遅きん。ん。粤ん


右郷人を集令て
寿ぎ酒をのむ
左重三郎書斎ホ
蘭を挑む

高須の虎次郎は剛勇のあるのみならず。その年いまだ廿に満ぬ。
若き武士なれども。婦女の赤心にて。
まさに月の夜はもあの日も背尾と相撲の尾咲がえらひ色入る数も積り
つ。今は互に捨がたくその中添と膠のごとく。ようや火水に入るとても離まじ
との誓ひ云に。況ともあく惑ひ入る。実に蒼海の底あるべきかぎりなふ
ける。有形べきに美ふぐふ。彩よりあるぬ。新代平史婦業ざるに如児の病
着。彼の時ともあふ思りて。髪揚化粧も花やかふ。ひと清き宮と祝て心
程に歌びやうに。堺のあんあ。妻合てその家を譲り。後義法法名
嫌老ざるの楽さに。見ふ偽と絶てるとと心巧ざるのうちいまだ
定めるく。心を配ざ居ざるとも。年ざ邪ざ方ようて。使の男ふさまぐの。

業ものごと齎して一色の書翰を副ざる。吉代平拝きて見を祝るふ。ふ程
ぶく人とりて。如児は伴ひ来ま手ざる。三一入ても生婚ふ蘭ざのご心地。
まさに除義ものに要もりとて。久ざく待来ものぬが。今日は日和も殊ふく。社
下もお続き今は全く病も癒心祝ひの一席を設ま祝とそのるまふ祝て
い為暮ある。如児は伴ひ人。若更蘭ものば稼くとも。浦りの積ふ儀
ものと。いと窮ものを筒の文体。喜代平は巻カ人。使ものの使ふち対ひ書
の趣き兼ものは。程ものを乗りゆべ。と云稟ましの人とのひ。如児蘭ものを会ふ
乗て必出くるる。その初度さあいいねども。月ふ二三回仕と祝。拝ふ礼
どもあん牙をりて。辞ざるんどさまるふあ。ものば要ものさまとあふ能託数久
てさめるが。今日は平癒の祝ひみとて。拝ざるの徒ざば。会ふ稽ものの事

ゐるべし。頓もて帰らんのこと。去年こゝに住侍せようと。堂て蘭歌だに。この邑の荘屋なりとて。高慢ふも程のあり。怖まるる花く辞こう向拍ふるゝいざ知だに呼つけて筆を潔せ。砂ふ立て侍世の損アふせんとい援怠るゝまや勿論ふ給れが災難ふ遭のふとう大救の美金を貸さるとあまだ恩ふ被てのこふもあるべ。然るこゝその金ふい貸を副て年こふ時日も美へぞ過海まさだ恐とこのゝ彼方ふい初て実分の設あり。元来彼方の心こゝ情こ救ひ一とふもあゝだ実ふ恐つ刀称父子の人が心を忍こて調へる。彼人ふこそ大恩あまこ。然いあゝずやとこのゝ彼ふ理ふまこど喜代平い頭と左右へうち揮て然るいひて考云ふも長いものふい携まろとい初ふ見笑のこるべ。彼方い荘屋勝まこて世方の損失ろとも渉金ふまれば矢張一坐の賓客ぞ。然るふい心の僻こ去来さ

造成せよ。ことふ揺ふ母も来ろ。勧むるふ蘭い恥の心ふ悔ると厚び進すぬ。ゐるこ作法ふ。父伝共ふ彼処へ到ふ。金貝い平金の歌びとて。恥数知ぬい。いふも更ろう。勝間田ろ人へ。大方ふ考集金庸と家屋も然落ふ膝と入べき所も無まこと張りく詰挂ろ。両個が来ると祝ろうも。三郎い驚ふ。ち笑こゐろ驚出て。使もうくこて来のひつれ怒こ人い来ひしこと大ろ今日も蘭ぬ。心地悪とて来のいぬう。こゝ臣ふ。逐く来ませとて歌びゐまこ去来こ世方で西西がこゝ夏ふれと業心にて。彼の素斎へ伴ろふ。こふい人の一通も居らびこ。こゝ。い彼方こ祝ろ。かく大勢を拉くべきふい。彼ふ。ろーゞ平金の歌びこと。入て。者もくと振かゝふ集金来ぬまが祝れとものまこ。慮外ふ客人多。然ゐゐ郷人

ぞて縁て面ハ惣まゝのみかハ気色しきも絶てありけれバ。うち甘ざめ入りつく。手自把て菓子と取て八程なく酒も進らせんに寛々と語りあへとかハの
立作が庖厨へ赴く畑女どもと遽しくて吸物及び種々の殽あんばいさせ
させ自身手ずから来てあれこそと勧む。当下件の郷人にも酒殽を出しかバ
馳走に預るべしとて或ハ女が来るとも候ハ、銚子と呼くもあれバ小皿片付
従ものもあり。かゝる厨の混雑一方ならんかハ兼て弥が母親ハ欅蔵藤甲斐に
云ハ。婢女ゆうち雑り口取刺身のけち運び順で箸へて吸物の足らぬを集
指揮す。また椀皿の出納まで。板前表方の世話までも心用ゐてさしかゝる
喜代平遥にこれを視て内君の在さバ母君一個で万事の扱ひも悲
草臥もやらん新しき老婆とも伴ひ役に立ばと御の手伝けも有るべきん

あの心付ありし不為を修り備手とならぬ人の手伝ひ初て稍ゝになりぬるを
が。いでや我們安坐して母君をや労すべき要に立ばと椀皿の出し納まで
するべきに去来手伝て参らせなんと喜代平は立あがり。庖厨の方へ趣て
ゆく。適々は蘭董之助の一個の他に人も居ざりまど隔紙は閉放ち彼処の
客の辞去まで阿思君まらバ親しくさん西めり。然れば董之助ハよそ所れり。
と母のかく人目もまゝば徒にハ挑まねど顔から成ずして蘭はよ心に思へのこ
ぞそハ人にあらずてよりあけれど。不幸にして親に別れ。また数千の月日も経さ
まば人の思ハんことを慙て胸苦しくも然止と云も出さでありつゝが答案すゝぬ
心の程は折に触くも知りあらん今少し日を過さバ表向より云入れてあん身と
迎へ娶んとハ縁くも思ひ詰てまどいせとの海士の濳ぐる地の貝にあらぬぞ。

圧巻人と曲ぶ。それまでの心程と十ぶが一日推量う哀まと思さびを密み
らんいふくとらんと受蘭いわと笑ふ。ある処が伝ふ。然とそい様うあども。
開いて蛍雪の仕厭ふ。他の心を迷いて益の処のみぞ措の人消遣る罪う
せび。辞の人と傍ど自さて興ド狂人を狂て屠狗ふ事に寄いちの注思霞
惜ふさるふもわ〜び。然まどのまぶ解ふ。ぬ悦恩るるまびまもあ〜び。注て桃
まび君こうせで。ちゃ七八ふい縛鈍〜と心程ふうち歓ぶ此方い有ふ正る
どいいて回ふ後立ふく旦恥心ふあり〜どもで云ふ辱ふるび度の邪ふて
敬をるてふ。ふあ〜ん死と陷ふ。狂ふくふの揚と淋〜ふび夫ふて若と思ふふで。
傍び陳らぬ舎釈を或ふ〜ふ別ふく。ふの機とさ〜んと心と苦め袋を入れて
亜ふ出〜。中ふ在ふ〜騰得の花簪て蘭ぶ膝ふあふふふ鶯英ふふねどれ

まび。ふん〜ふ排せて祝んりのと跳らて調ひあふぬ亜ふ頭挿て祝せの人ふの
ふ蘭ふくふ。ふ把を処へ閑て。遠いあり雑きとるまどかく花やうふる
簪い。吾倅ふどふ仙倉〜ふ。夫のふるび漢士のまう。橋并と曜ふ
い縁の切情とふふて祥ふくや伝ふふんと心ふ乳の云業ふと確ふいふく
心地惑ひ。祝心ふ記折ふ。喜代平ふ〜ふ人ふふふふ英氏ふふ程ふ。賓客
ふ大ふ保ふぬ。吾仙ふ暮ぬどふ眠まして五飯ふんと扨ふふふふふふて
おふぬやふ女児准ふいふ死と促ふと。僥倖ふて蘭い身と跌ふ。稼ふの食亟
厚ふと俗ふふどふ重三郎い業ふ相遠〜。袖ひふ留て毛いふ。ふひふざる
早飯ふ。今までい動也ふと。丸ふ心ふ落着び紙ふを飯て。その後ふ寛ふ
とふん〜ふ父ふふい。歓待ふ〜ふひ〜ふを今飯ふふ上いふく興ふ。夫ふ尚ふ笛

みも。酒やの積聚と書るを仰らるゝ倣しなりけりと然こそ有べき。家業の者
代平は押かくして。いかにも此書にはその由の仰あれども生憎に老婆は今朝より
眩暈が発て。臥り中ておりますれバその余には奉公人のみ時々にかなはねバ。まさきやあるべく
と。まづ今日は脈を診ねと止ても驻まらず気違者重二郎は計較し胸の算用
気遣ひ。齟齬いぶいせんと躊躇あつゝ。欅外て母親の足を早めとく来てゐよく足下は傍ら
の薬。呉服が家に病人の在とろ人のと引止るは心なき業なり。老代平刀杖は右にも左にも蘭
の寮は酒でも宜らんかくとのひまで蘭もまた母が持病心えあくとひ給ひもせぬ
非飯らんとの趣に於てハ今更詮方なし。数多の客に事り紛れてまづ足下等と盃
せバ弥あけまと寿ればざ酒今一盃酌みて切に勧むる志丈さんが辞もいかゞ酒のみて
老代平は盃をあげ。二言三言飲む端に蘭は寮は酒も飲まで退屈にてありぬらん。

しも其処にある菓子などと母が指揮に重二郎自ら出きて持来て其処へ並ぶる
種々は求肥羊羹餡餅秋の中の砧まで最中の月の落雁まで、いざく進れ
と観むる欵待にも猶元は易からじ。当下母は小膝を進めて今いふものとこそまつ老
の心の急まてハ欽び酒のその序にまさ歓びを述れんとて足下に語ることの
あり。外は他ならじ重二郎も先頃渾家を喪ひて鰥暮しのつらさを知るべし。心
の痛ましさて一日も早く新婦をとは思へど渠も病着の全く快られねば今日まで
默止せしが既に年金の祝ひもいつの健に有つけ頻りに継室をと思ふなり。蘭が寮
いこの郷にまさ両個もある女児あり常に名の仰せぐを家にて彩婦にせまほしと頼
人の処務も深く心に協ひて是非に娶らんとも思ひぬ。さりとて足下等夫婦の衆一
人児なれバ他へは遣じといひもやらず、縁て見ぬ然までもとれハ是ぞ其の血脈を

わらぎ
さら次郎
重三郎
忍びて西個の
さゑを大
怒は

重三郎

絶さじと思ひてのことなるべし然るに其の仕様詮方ハ幾許もあるよしなの
家へ曜ふとも両個が中に児を産バ熟順となりて足下に進らし次とすてとの
家を嗣せんとすべきバ血脈を守るに於て双方世一の難も無く千代万代の睦とも
絶じなのことめ給ふに喜代平力称とく受納くれとき目出度き寿ぎの席ぞ不図り
がいかに甚しかるん互に釈子並び居ることにて明ミ地にひゞきならバ一云半句の飾
きもなく元より契り合中にて倖を乳のもの手習暇ひとぐ足下が心一つにて起
へることも破ることも有ることぞうして強にいさまよて喜代平手を又さ考へ見る重
さ卿ハ舊家といひ豪富なる生中見が家を嗣せんより女児が為めハ儉倖なるべし
然れども我くの思ふ所に別あれバ父子なるとてりが心一つを以て定めがたし渾
家にも譚らひ納得の上ならでハと思へるぞ忽地荒示うち笑えて相縁奇縁と

いふとあれど我に未なる蘭を何とぞお目めの間りけん是も不測の縁なるべけとべ
進らすらいいど母のゐつさ小当人の心の程もいざ知らず云稟儆さん蘼忽と
今宵飯すて篤と譚らひ日なり回答をすると侍らん往ハが浪ハ別に仔細も
いらいじと言て歓ぶ重三郎いそやさむ物になりてるやく笑を含みて妹も気なり
母も倶とうち欽び足下ぞに仔細なくら蘭ハ寡ハ元よりにて母ハも俗とう辞を
あのん然まど本ず九分九厘ハ整ひて嗟乎も今ひとつの欽びむ一つとまで続く対気
を賭もべしと実ニ子としの釈の心ハ賢き思の差別なく事の鋒先の論所え
忘るるまで不歓さまと侍て當居る蘭ハ人あまく胸樣を又うん人あどて我ぞろう
いと易きる回答せしなん容子とられひあが此身ハ二世とらひ文せん人さあるを
いかせんと思へバ胸も裏きを鍼の莚に座するがやくいと壇かくぞ思ひける径なく

その日も暮けはべりよく暇まうさんとて。供の男を遣しつて妻子の門をたずねば。
蘭い父が侍へ分を摺傍て只今も潭らひあひ縁のと。養はへ彼処へ送りあへば心
うつやと密と問ひ喜代平の変を低め重て弟が赤ん分と愛て他の白状多
い初るものうつて見賞殘の慰こふ爲べき心と森まる赤ふ今をでい拒きふ爲せ
ば成べきさけいをさけーら妙さへふさへ係ぞて。今日のどりふるまべ。その赤心いく知
れぬ本妻ふ分ふるとるつ。赤ん分ハ国より合くも。生涯安楽ふんと思ふ。然されば
法て辞むも換ふるまうるべ妙ゴ張。赤ん分が胸も計らまねば今のやくふ以て赤死
ぬよりや生まて家ふうつとも廻らぬ世界を儀らまて且暮劬労とせんよりも貧賤さ
情方へ性き気安く送るゴ遥ふ倍ふ。重て弟も人品骨柄婚ゐて不足いふ。
帝御の孫といて再縁とて思ふ繼まのあるふ赤ゴ。見程の縁組へ

まさ世間ふ多くあぬと。爭辞める條あん。赤ん分も別ふ仮組ふあるまゴ。妙
大ふさ將ふあん早く飯まてとまを潭て。行ゴせんと喜代平ハ心ふ辞まふ猜縁史
を空ゴふ胸法まと行を故障ふこのとを。辞まゴ善ん発ふかも。虎次郎と潭合ふ
て道て術を作せんと歩むも力ふ死足ふ端まとふ家へ帰りぬ元来渾家ゴ眩
暈とて入の消らゴとふ。譎ふて何ゴもあるぬ。渾家ハいち出今日の動静いふる
容ゴと問ゴふ箇様さの様ふしとかの振りを紫勢を潭まて後ふ如此とう。
赤ん分ハ何ふとふを空渾家の心も喜代平ふさて替まるとふく。夫まよりと
思ひぬゴまゴさ一変る僥倖を暗外まを送憾さゴ蘭ゴ胸次第ふ回答しまと
いふふよう。喜代平いちち笑まて。我の合まる良縁さるゴ蘭ゴ辞むべさこを蘭よ
ふ縁組いふふうと改めて問ふ我心ハ最るまゴいふらまを今の分の恥ひ胸

まづ頻に東きて果敢きたくしのものいとぐるち業ぬる景勢に今有に限れる
とゆいあくび翌きて母と潭合きて。回答せよとらひ孫一その夜いとみ歌
けるぶ蘭は子舎に入て。森にも更に眺いあひび左さ右さ若し先且
こに病ひと秘一。緯を延てそのうちに。ふくく己業を決めんと。その明の朝の心
地悪とて。起も出ず在るまくに。その商儀も暫く止こかそその日の薬膏に尾
咲ら来きび密に拓き如此くのを告今有ぶずに聖にも更びのとと渡人
に云偽そよとらひけきび尾咲い出てこをもまき俱に痛む胸のうち開い速にその
こを出るに易きとなぶ。虎刀秘の爺れの若代急に花洛へ往ねばるるぶと
今日約まぶきに宅平を供に連て起ぶあひぬむあ後十日可に飯を表るとい
宣ひき。序あくびこのことを懐さるに云せよとその云偽といんとて参りさるにもひも

拉ぬ。その出来て表感ぶまで。如何とも術あるまくび。まづ病気ぞと投落きて。
虎刀秘ぶ飯をのみを俟のうち他に生病ぶきと拠首一。立に吐息を吻つきぶ。
有秘べくに一点ぶぬ。重三郎に一両日回答のる死に心苛きて家の老僕の甲乙
を交ぶに促て。その返答を受に就きて。こに於て喜代平夫婦もかとて辛に果
ぶ蘭ぶ病気ぶとび乞ひとを俟のいと。その回毎に同しさ為ぶ接扱とて
おきるあで重三郎に搖へるぶに女児蘭ぶ武頃の容強に宮を辞むの心
見ゆいの両枕の心理に秘あん遮莫蘭ぶに。ぶ入きび仔細ぶ一。今
青密に更びきき潭に祝んのと。舎の密さに具に咲きに死。その夜二更の
比及に。ぶ家を出てに絶ぶ喜代平件へ参り。牆の廻きを義遠ぶ。その切
戸にて蘭の。舎の小度の入口のぶと才を潜めて溺と推せば。そのまくさとと

開きさう。天の供えと歓びて迎入れんとすれども遣ず卒爾ふ雑魚ども
賊と云いまで。あり〳〵縛ハ遂ず。如何いせんと言あり〳〵。沈吟ふ暗て庄陸の柚の
樹の下ふ身を潜め。便宜を候ふ。その切戸をさらさと開け。狸ふ引き続き
さ固めの。食の戸にへ推ものあり。いと時けまび面ざの宮ふ。ねど高須ふ虎
次郎ふ彷彿ふ。主三郎ハいと怪ム眼を止めてよく視るふ。嘆ものの
戸とモと開き。狸ふ出る女の貌。ものを定ふ蘭ふ。危ふあて忽地ふ雨戸引
立入るまび主三郎ハこれと招て。拾さ悔しさ烈火のごく。腸さ人ふ熱かく。通ま
入らんと云ひ。ものを。ふ時ふ。ふ。ふ。
何ふ計ふ縛長けまびふ畢ぬ。二編発市の日と候て。その分解を知り。後ひね
忠臣阿佐倉日記初輯巻之五畢

清 顧 南原先生編選
増訂 隸辯 中本 全四冊
日本安藤龍淵先生増字

明清 高久靄厓先生原摹
名家 巾箱畫譜 白紙摺 帙入四冊
矢野西洲先生著

從三位東久世竹亭公題辞 岡田良策先生編輯
大沼枕山先生 明治
小野湖山先生主
龜谷省軒先生 文雅 都鄙人名録
溝口桂巖先生 全壱冊

梅陵井澤先生著
新訂漢畫指南
山水之部二卷 人物花鳥之部二卷
四君子之部四卷 画法画論 二卷

岡田良策先生編輯
近世名婦百人撰
伊藤静齋先生圖画

孝貞節烈 岡田霞舩先生編輯
近世名婦傳
伊藤静齋先生圖画

大岡政談 元岡維則先生編輯
畦藏根接柱 全十冊 近刻
伊藤静齋先生図画

松村春輔大人著
春風日記 四編出版 五編近刻 二書房合版
安達吟光先生画

元岡維則先生著
大岡政談 村井長菴調合机 全部 廿卷
伊藤静齋先生画

書肆
浅草三好町七番地 聚榮堂 大川錦吉藏版

松亭金水作
忠勇阿佐倉日記 全部 十五卷
玉蘭齋貞秀画

本編ハ佐倉宗吾生立より終末に至るの事歴且事に関る人員善悪其由来を詳らかに巻或ハ農民甲賀の能へ愁訴の段宗吾将軍家へ直訴一竟に刑せらるゝ鉄牛の仁心木虫明神の奇瑞追慕に載く冠を結ぶハ愛顧の諸君御高覧を奉希ハ

松亭金水作
芳薫好話
高木逈實傳 初編 二編近刻
蒼飾為齋画

三編近刻
猶高評を奉願候

此編ハ世に名高き高木折左門一代の傳なるを江湖の諸君に奇珍説さ勿ぐあるを諸書より抜萃し且著者の意を加へ面白き草紙なり巻をひらき猶高評を奉願候

梅亭金鵞戯作
妙竹林話
七偏人 全部 拾五巻
鶯齋画

此編ハ世に流行る洒落本の一部合ハ梅亭主人の最も秀作なり其実に抱腹無類の可笑味ある珍書なれバ笑ふ門ハ福来る春を始め乃福寿門開せ猶も猶愛顧を編に希ハ

明治十六年二月九日求版御届

書肆

東京府平民
大川錠吉
浅草區浅草三好町
七番地

大坂書肆

大坂本町四丁目 岡島真七
芝三島町 山中市兵衛
浅草廣小路 吉田久兵衛
横山町四丁目 辻岡文助
日本橋通り三丁目 小林鉄次郎
弥左衛門町 武田傳右衛門
浅草新福井町五番地 髙梨彌三郎
同三好町七番地 大川錠吉

東京書肆